

◆『戦史秘話』第八話◆

明治天皇に食事に招かれたドイツ軍人 ーアルフレッド・フォン・ヴァルダーゼーー

明治天皇と外国人接遇

現在では、天皇皇后両陛下による国際親善は盛んであり、訪日する様々な分野の外国賓客とお会いになられている。では、明治天皇の場合は、どのような方とお会いになられていたのでしょうか。

第一に、外国の王室・皇室関係者である。第二に、駐日公使（大使）などの外交官で、外交儀礼として、頻繁に国書捧呈のための参内が行われた。第三に、数は少ないが外国軍人である。主に、日本に寄港した英米仏露などの東洋艦隊司令長官であった。

その際、高位の重要な王室・皇室関係者に対しては、お招きになり食事を共にされることがあった。例えば、ドイツであれば、1899（明治 32）年 6 月から 7 月にかけて訪日したヴィルヘルム 2 世の皇弟アルベルト・ヴィルヘルム・ハインリヒ（Albert Wilhelm Heinrich）である。ハインリヒは海軍軍人でもあり、訪日当時東洋艦隊司令長官であった（のち、大洋艦隊司令長官、海軍元帥）。

しかし、外交官や軍人の場合は、食事を共にされることはほとんどなかった。例外的に、日露戦争終結直後の 1905 年 10 月、日英同盟のもと協力関係にあった英国東洋艦隊司令長官サー・ジェラルド・ノーエル（Sir Gerard Noel）大将以下英国の陸海軍軍人 36 人を招いて、豊明殿において招宴が催された。

このようなケースは極めて異例であったが、単独の訪日に際して天皇が会食された外国の軍人がいた。その人物は、ドイツの陸軍元帥アルフレッド・フォン・ヴァルダーゼー（Alfred Graf von Waldersee、1832 年 4 月 8 日～1904 年 3 月 5 日）である。

ヴァルダーゼー元帥と北清事変

ヴァルダーゼー元帥は、1832 年 4 月、ポツダムで貴族の家系に生まれ、軍人となる。参謀本部勤務を経て、1870 年駐仏武官となり、普仏戦争終結後の 1871 年にはパリでフランスとの講和談判委員を務めた。1882 年にヘルムート・フォン・モルトケ（Helmuth von Moltkes）参謀総長のもとで参謀次長となり、1888 年には、モルトケの後を継いで参謀総長に就任した。

一時、辞任したビスマルク宰相の後任と目されたものの辞退し、1890 年からは陸軍第 9 軍団（アルトナ）司令官、第 3 軍管区総監などの要職を歴任した。1900 年には陸軍元帥の称号を得ている。

その後、1900 年に勃発した北清事変に際して、新たに編成された 8 カ国連合軍の総司令官となった。



ヴァルダーゼー元帥

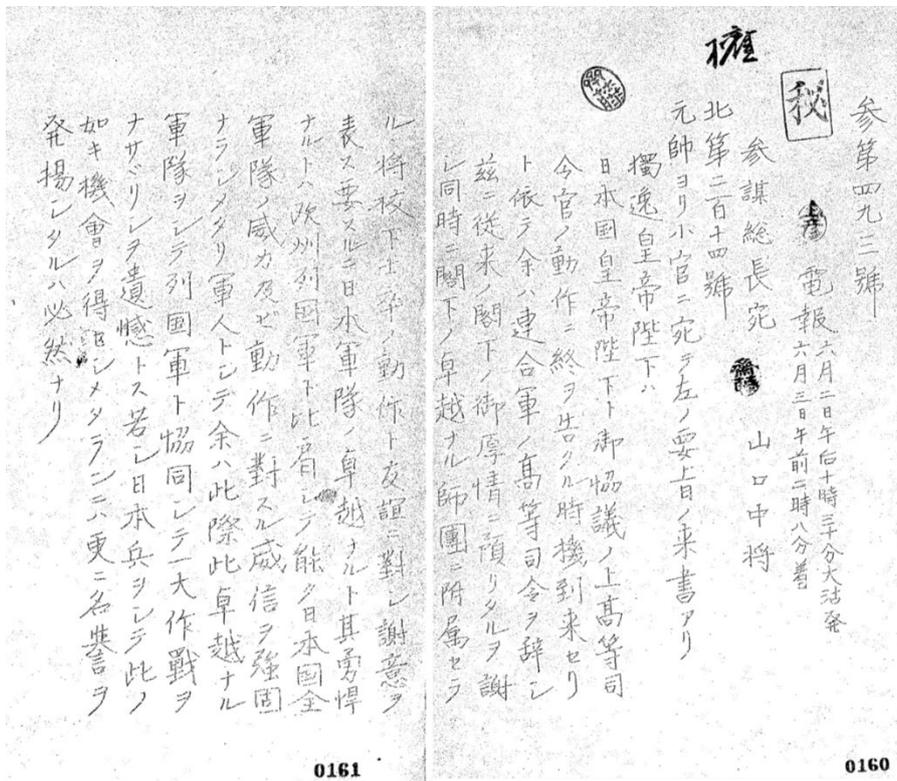


ヴァルダーゼー元帥、山口素臣陸軍中將など日独将校

(出典：小川一真製版『北清事変写真帖』小川写真製版所、1902年)

幕僚として日本からは福島安正陸軍少将が派遣され、ヴァルダーゼー元帥を補佐した。ちなみに、福島少将は、1887年から1891年にかけてドイツ公使館付武官を務めており、ドイツ語は堪能であった。

ヴァルダーゼー元帥は、事変における体験・見聞を通して、日本軍を高く評価していた。以下に示す史料は、北清事変に派遣された山口素臣第5師団長発大山巖参謀総長宛の電報（1900年6月2日）である。



* 「海軍省公文備考 ①戦役等 清国事変 明治33年 清国事変海軍戦史資料 卷30」(海軍省-清国事変-M33-30-30、アジ歴レファレンスコード：C08040812500)

本電報では、山口師団長宛の元帥の書簡の内容が、以下のように記されていた。

「日本軍隊ノ卓越ナルト其勇悍ナルトハ欧州列国軍ト比肩シテ能ク日本国全軍隊ノ威力及ヒ動作ニ対スル威信ヲ強固ナラシメタリ軍人トシテ余ハ此際此卓越ナル軍隊ヲシテ列国軍ト協同シテ一大作戦ヲナササリシヲ遺憾トス若シ日本兵ヲシテ此ノ如キ機会ヲ得セシメタランニハ更ニ名誉ヲ発揚シタルハ必然ナリ」

当時の日本軍の奮闘と軍紀の正しさは、サー・クロード・マクドナルド(Sir Claude MacDonald) 北京駐在英国公使、『タイムズ』特派員のジョージ・アーネスト・モリソン (George Ernest Morrison) など、外国の外交官や報道機関によっても伝えられたことはよく知られており、特にこれが日英同盟締結の一因となったとも言われている (ウッドハウス映子『北京燃ゆー義和団事変とモリソン』東洋経済新報社、1989年など参照)。

ヴァルダーゼー元帥も、プロフェッショナルな軍人としての視点から、日本軍を率いて「一大決戦」を行いたいと評したのであった。

元帥の日本訪問

事変終結後、ヴァルダーゼー元帥は、帰途随員 16 名を従えて日本に立ち寄っている。1901 年 6 月 8 日から 23 日まで 16 日間滞在し、福島少将が同行・案内しつつ、東京のほか、神戸、京都、日光、長崎を訪問したが、日本各地で大歓迎を受けた。元帥の動向は、連日新聞各紙において詳細に報じられたのである。

6 月 10 日に東京に到着した際の様子について、「停車場 (新橋駅) より離宮 (宿泊先の芝離宮) に至る迄、沿道両側には同元帥を歓迎せんが為め朝来群衆せる者、幾んど立錐の余地を遺さず、近來の盛観を極めたり」(『二六新報』6 月 11 日) と報じられた。

また、『読売新聞』は、「論説 ワルデルゼー元帥の来朝を迎ふ」(6 月 10 日) と題した記事を掲載、単に元帥であるだけではなく、友好国の貴賓として上下官民挙げて歓迎・歓待するとしたうえで、「尚仔細に考ふれば我国の將軍に於ける關係は頗る浅からざるものあり、(日清戦争、北清事変の) 我戦勝は半ば我陸軍制度の整齐完備したるが為なるを思へば、我国の独逸に負ふ所、則將軍に負ふ所の小ならざるを知らん」と記していた。日清戦争、北清事変における日本の勝利は、ドイツ陸軍の貢献に負うところが大きく、そのドイツ陸軍の礎を築いた元帥の功績に言及していたのである。

6 月 11 日には、明治天皇主催による午餐が豊明殿において催され、元帥一行、ドイツ公使、日本側からは、皇族方、元帥、宮内大臣、陸軍大臣などが招かれ、天皇は以下の御言葉を述べられた。

「朕初て卿を見るを喜ぶ、卿去年清国に出征以来、能く其の任務を盡し、我が派遣軍隊が名誉を全うするを得たるもの、一に卿が指揮宜しきに因る、是れ朕の深く感謝する所なり、尚朕は貴国出征軍隊の殊功ありしを聞き、甚だ之れを感賞せり」(宮内庁『明治天皇記 第十』吉川弘文館、1974 年、74-76 頁)。

このお言葉を聞いて、元帥は「欣悦に堪へざるものあらん」と記されている。そのほか、閑院宮、小松宮、有栖川宮、大山巖参謀総長、児玉源太郎陸相などの主催による招宴も開かれた。

また、元帥は、京都滞在時、北清事変に際してドイツ軍との最初の連合作戦で戦死した服部雄

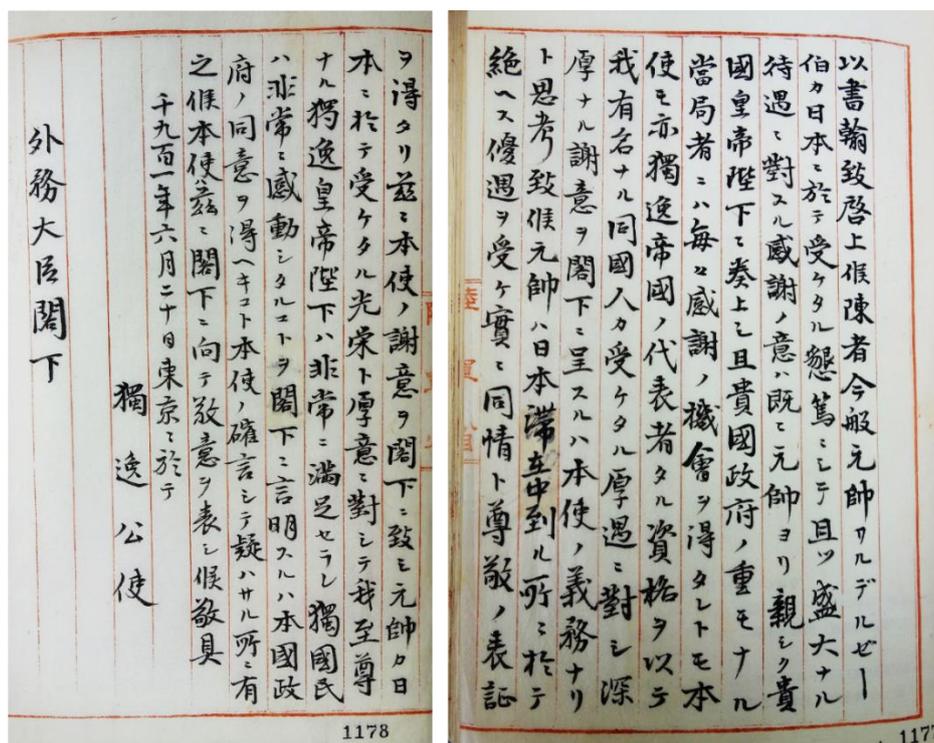
吉海軍中佐が眠る伏見の龍運寺の墓に公使館付武官を派遣、花輪を捧げ、さらに、6月10日には、中佐の未亡人である服部もと子と面会、「中佐の戦死を賞揚し其墓を弔へるの武人の光栄たるを云ひ遺族の事共懇ろに問ひ慰め対話一時間悉く涙ならぬはなかりき」(『東京朝日新聞』6月12日)と報道された。

服部中佐は、1863年5月に京都伏見で生まれ、海軍兵学校(海兵11期)、海軍大学校(甲学生4期)を卒業、日清戦争では防護巡洋艦「秋津洲」の砲術長として活躍、1899年12月に海軍中佐に昇進した。北清事変に際して、陸戦隊大隊長として軍艦「豊橋」に乗船、塘沽に上陸、英独露各国の陸戦隊と連合して、大沽砲台攻撃において奮戦の末、1900年6月17日に戦死したのであった。遺体は、ドイツ軍艦に收容され、その後日本の艦艇に搬送された。

ちなみに、服部中佐を介抱し、遺体を「秋津洲」に護送したドイツ砲艦「イルチス」艦長のランス海軍少佐に対して、日本国政府から勲三等旭日中綬章が贈られた。同少佐は、負傷して横浜のドイツ海軍病院で入院中であったが、ドイツ皇帝からも、最高の戦功章であるプール・ル・メリット勲章が授与されていた。

日独の絆

このような歓迎に対して、ドイツ側は感謝の意を表している。以下の史料は、曾禰荒助外務大臣に対して表明されたドイツ公使の謝辞(6月20日)である。



* 「陸軍省大日記 参謀本部関係文書 参謀本部 雑(秘) 明治34年 特号書類 第2号 3冊の内2」(参謀本部一雑-M34-5-121、アジ歴レファレンスコード:C09122747000)

公使の謝辞では、ドイツ皇帝にも言及しつつ以下のように述べられていた。

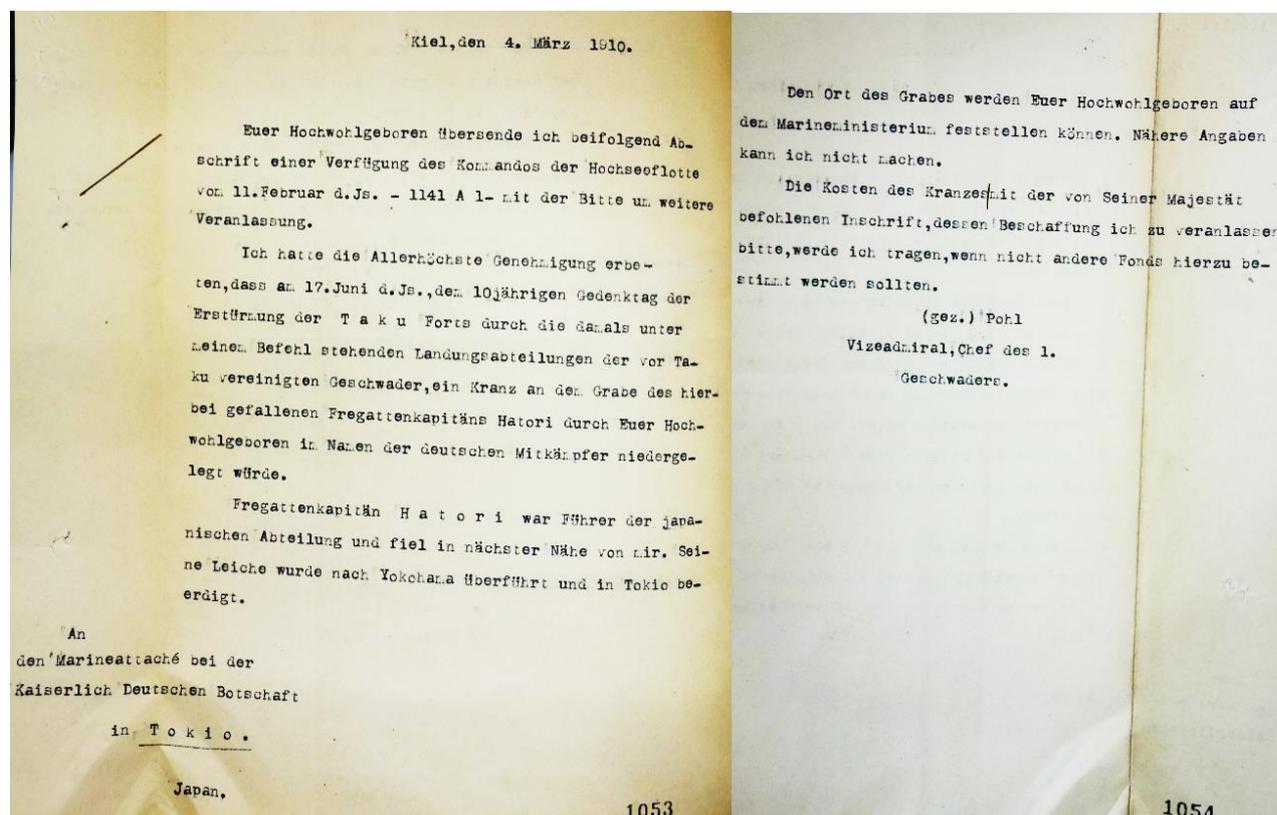
「元帥ハ日本滞在中到ル所ニ於テ絶ヘス優遇ヲ受ケ實ニ同情ト尊敬ノ表証ヲ得タリ茲ニ本使ノ

謝意ヲ閣下ニ致ス元帥カ日本ニ於テ受ケタル光荣ト厚意ニ対シテ我至尊ナル独逸皇帝陛下ハ非常ニ満足セラレ独国民ハ非常ニ感動シタルコトヲ閣下ニ言明スル」

元帥は、その後バダビヤ（現在のジャカルタ）を經由して帰国の途に就いたが、それからわずか3年後の1904年3月、ハノーファーで逝去した（享年71歳）。明治天皇は、弔意を表すると同時に、小村寿太郎外務大臣を介して、遺族に弔電を発している。ハノーファーには、元帥の銅像が建立されている。

元帥の逝去から6年の1910年6月、前述した皇弟ハインリヒの訪日に随行した第1艦隊司令長官のヒューゴ・フォン・ポール（Hugo von Pohl）海軍中将は、服部中佐没後10年の記念日（「10年祭」）に、中佐の墓前に花環を贈ったのであった。日本側は深く感銘を受け、斎藤実海軍大臣が謝意を表している。

以下の史料は、1910年3月4日付ポール司令長官が在京のドイツ大使館付海軍武官に宛てたドイツ側の調整に関する文書である。花環の贈呈が皇帝の勅許を得ていることが分かる。このように、年月を経ても、ヴァルダーゼー元帥の遺志は、引き継がれたのであった。



* 「海軍省公文備考 ⑩公文備考等 明治43年 卷12 儀制9止」（海軍省—公文備考—M43-12-1043、アジ歴レファレンスコード：C06092307000）

本年は日独修好160年、北清事変終結（講和議定書締結）120年にあたる。時あたかも、日米に加え、ドイツをはじめ、英国、フランスといった、北清事変当時の8カ国連合軍の国々がインド太平洋地域への関与を強めつつある。

（研究幹事 庄司潤一郎）